

正しき、其國にして古き傳説を記せる物なるに、此白杵郡なるをのみ記して、霧島の方をば記さぬを思へば、霧島は非るが如くなれども、古の風土記ども、傳はらざれば、其全書には霧島山の事も記したりけむを。従々引るのみこそ遺りたれ、全きは彼書どもには、其をば引漏せるも知りがたし、霧島山の方も正しく峯二ツ有て二上なり、凡て古に二上山と云るは、皆峯二ある山なり、又風土記には、稻穂の古事も白杵郡なる方に記せれど、是とはた今現に霧島山に之これり、又神代の地名、多く大隅薩摩にあり、彼此を以て思へば、霧島山も必ズ神代の御跡と聞え、又臼杵郡なるも、古書どもに見えて、今も正しく高千穂と云て、まがひなく、信に直ならざる地と聞ゆれば、かにかにかにいとまざらはし。

〔春波樓筆記〕予考ふるに、此鉢何の爲に建て置きしと云ふ理もなく、天より降りしにや、國常立の尊の建て給ひしにせよ、何になると云ふいはれもなく、埒もなき事なり、全く自然天然と鉢に似たる似象と云ふ者なるべし、吾國神代の事は傳記なし、神代以前は、何れの異國の入住居したるや、播州石の寶殿と云ふあり、四間四面に石を剥りて造る者人工なり、又因州に熊權現とてあり、皆柱石を以て疊む、是も人工の者にて、何の爲に造りたりと云ふ事を知らず、民俗の云ひ傳へには、古の神、此海へ橋を掛けたまはんとし給ひしとぞ、又蝦夷地にタサリチと云ふ處あり、是は六角の柱石の、數かぎりもなく、海岸皆此石なり、是は人工にはあらず、天然の者なり、近藤氏エトロフ島へ五度行かれし時、庄藏とて南部の者、畫をよく描きしに蝦夷地を寫させ、其圖を予又寫せり、世界の中には、此類いか程もある事にて、蘭書中には、奇妙不思議の山水景色ある事なり、吾日本のは、僅の天の逆鉢石を見て、奇妙なりとするは、世界の事を知らぬ故なり。

〔萬葉集二十〕喻族歌一首并短歌

比左加多能安麻能刀比良伎多可知保乃氣氣爾阿毛理之須賣呂伎能可未能御代欲利○下

〔輪軒小錄〕山火之事

山の焼くこと、日本には處々にあり、富士山古へは常に焼け出づと云へり、富士の烟も、今は焼けずと、何の比よりか焼け止まりしことを知らず、淺間の岳は今も焼くるなり、此外肥後の阿蘇、